

農学諸分野の 「繋がり」と農場



表

紙は多摩農場の水田です。私たちイネ研究者は皆、この水田で泥まみれになりながら育ってきました。水田の向こうには本館前の桜並木と並ぶ農場の名所、ポプラ並木が見えます。

東大農場は、明治11年に駒場農学校(後の農学部)に開設されましたが、昭和10年の農学部本郷移転に伴い、現在の西東京市に移転しました。移転のための用地買収は昭和4年の秋にはほぼ完了しましたが、翌5年の冬に、現在の本館中庭にあたるところを撮影したのが上の写真です(多摩農場の米川智司先生のご教示による)。右奥には完成したばかりの「第一収納舎」と「作業室」が見えますが、これらは今も「収納舎」・「工作室」として、ほぼ建築当時のまま現存しています。左奥は松林となっておりますが、当時、このあたりはこうした松林が一面に広がっており、表紙写真にあるポプラ並木のあたりも松林でした。

開設から今日に至るまで、多摩農場は農学部農学科(現、生産・環境生物学専攻、生物・環境工学専攻および農業・資源経済学専攻)を中心に、学生の農学教育を根底から支えてきました。学生達は圃場での作物栽培の体験を通してはじめて、個別・細分化されている現在の農学理論が生産の現場で技術として再編・総合化されることを学びます。持続可能な社会の構築における「農」の役割に大きな期待が寄せられる今日、農学におけるこうした専門分野間の「繋がり」の重要性は、いやが上にも高まっています。

この夏、農場の移転に関する平成15年度の評議会決定が見直され、フィールド科学の教育研究拠点として多摩農場の整備が決定されましたが、当専攻としまして、こうした「繋がり」を大切にしながら、これまで以上に強力な支援を農場に対して行っていく所存です。

生産・環境生物学専攻長 根本圭介 教授(栽培学研究室)